

# 教員志望学生に向けての古典文学教育授業実践

阿尾 あすか（奈良学園大学・講師）

## はじめに

発表者は主に小学校教員を養成するという学部で、中学・高等学校の国語教員の免許取得を希望している学生に向けて国文学を教えています。対象とする学生たちのほとんどが古典に対して苦手意識を持っています。そもそも高校で、古文の授業がなかったという学生もおり、歴史的仮名遣いが読めない学生もいました。

ここで、中学校で和歌はどのように教えられているのかということについて触れておきたいと思います。中学の国語教科書の中で高いシェアを占めるのは、光村図書版ですが、例えば和歌の単元では、本文には詞書や題詞がなく、和歌に現代語訳が簡単に付いていて、脚注で作者と語句についての説明があります。詳細については、本文末尾の「広がる読書」という項目で関連図書を紹介し、自分で調べて知ることができるようにしています。単元の最終ページに到達目標などの項目があり、そこにこの単元での学習の目標、「効果的な表現や語句の使い方に着目して、和歌を読み味わう」、「和歌に表れた昔の人の心理や情景を読みとる」ということが挙がっています。また、具体的な学習方法としては、「表現について感じたことを話し合ったり、鑑賞文を書いたりする」ということを指導しています。

すでに、志立正知氏（「国語教育における「古典」」『日本文学』64・2015年）の指摘にもありますが、和歌についてはソースだけが挙げられているので、どのように教えるかは、教員の力量に大きく頼ることになると思います。和歌の表現技巧についても、枕詞、序詞、掛詞の説明が教科書に載ってはいます。ですが、これも教える側がその機能についてよく理解したうえでかみ砕いて教える、何か補助教材を使うなどして教えなければ、中学生が本質を理解するのは難しいと思うのです。

教科書を作った側も、そうした問題を予期しておられるとは思いますが、中学校教員または教員志望者でも、現代文は好きだけれど古典が苦手で、どう教えていいかわからないということも現実にはあります。「そういう場合、どうやって教えていったらいいんやろうね」という問題を、最初に学生たちに提示して一緒に考えました。今回の発表で取り上げた講義では、「中学生に難しそうな古典知識をどうやって教えていけばいいのか、私が提案します。それをみんなが実際に体験して、自分の考えを深めていってくれますか」と投げかけました。本発表はそうした講義での取り組みの成果の一部です。

## 2. 講義について

講義の対象となった学生は、ほぼ大学2年次生で、中学・高等学校国語科教員免許の取

得を目指す者です。中学校の教員志望者がほとんどです。2015年度には約60人、だんだん免許を取るのが難しい（発表者注：小学校教員免許が必修でさらに中高免を取る必要があった）と分かってきて、次年度には22人に減りました。半期15回の講義です。学生の古典への拒否反応を少しでも和らげたいと思ひまして、中学国語の教科書に載っている勅撰集入集歌を中心に取上げ、一首一首の解釈をしながら講義を行いました。

2015年度の講義、受講生約60人でしたが、アンケートを取ったところ、受講生のほぼ全員が『百人一首』のカルタ遊びを経験していました。楽しかったということも言っています。しかしながら、それが古典への興味へとはつながらなかったというのが、ほとんどの学生の現状でした。「小学校で体験する『百人一首』から、中学校で学習する勅撰集の和歌へと学習をつなげられないか。どうなんだろうね」ということを学生に問いかけてみました。そこから「古典文学への興味を引き出すような学習はできないかな？そこらへんも考えてみて」というように学生に問題を提示しました。こうした問題意識をふまえ、特に『百人一首』にも選歌された勅撰集入集歌を取り上げることとしました。

1回の講義での基本的なスタイルですが、資料としてお配りしました2枚のプリントを見ていただきたいと思ひます。実際に講義で使用していたものですが、ご覧になった方はあまりの量の少なさにちょっとショックを受けられてしまうかもしれません。まず、古典についての基礎知識を身に付けさせるという目的も果たさなければなりません。そのため多くのことを詰め込むのはやめ、確実に一回の講義で身に付けられる内容だけにしました。両面一枚が講義のプリントで、あと一枚は【ワーク】+【振り返り】のシートです。

まず導入で、前回の振り返りをし、そこでみんなが書いた振り返りについても紹介してから、講義を行います。その時は講義プリントを使います。大体15分くらい説明して、「ではワークをやってみましょう」ということで、【ワーク】+【振り返り】のシートで、15～30分程度ワークをしてもらいます。ワークについては、「自分で調べたり、考えたり、周りの人と話し合ってもいいです」というようにします。そのあと答え合わせの説明をし、さらに発展した内容の講義をする時間が30分程度あります。時には、またもう1回ワークを15分くらいすることもありました。最後は私がまとめて、「振り返り」の時間を設け、この1回の講義で気づいたこと、感想、疑問を書かせました。良いものは翌週の講義プリントで紹介します。

振り返りについては評価を付けて返却しました。良かったものには線を引き、ここがいいという評価をつけたり、コメントをつけたりして返します。成績に関わるということもあり、学生たちは回を重ねるごとに振り返りを一生懸命書くようになりました。また、翌週にこの振り返りのここが良かったということを言いますと、やっぱりほかの学生も刺激を受けるのか、多くの学生が頑張って書いてきてくれるようになりました。たとえば、本発表のレジュメにも載っていますが、この時は、その前の時間に、「現代の子供たちに古典に親しんでもらうにはどういった教え方をしたらいいか」を考えてもらい、それについてみんながそれぞれ意見を言いました。その意見の中でどれが良かったということ、ワークでまた学生に書かせるということを繰り返しているうちに、いろんな意見が振り返りでまた出てきました。そうすることによって、学生は、「自分で考える」、「当事者意識を持つ」ことが身に付きましたし、またそれらを植え付けるようにもしていました。

### 3. 実践例

では、どのような実践をしていたかをお話したいと思います。和歌の正確な解釈に困難を感じている学生が非常に多かったので、まず丁寧に文法も扱いながら和歌の修辞について学んでいくということを目指しました。また、最後までうまくいったかは分からないのですが、現代短歌と同じような理解で和歌を読もうとするので、「和歌の修辞は不要じゃないのか」、「和歌の表現についてくど過ぎて気持ち悪いし、遠回し過ぎやと思う」(2016)という意見を書く学生もいました。この学生は非常に熱心に取り組む学生で、本当にそう思って書いたようです。そういう学生もいる中で、どうやったら一首の意味を正確に理解して解釈もでき、鑑賞もできるようになるか、そして和歌の修辞についても正しい理解が得られるだろうかということが教える側の大きな課題となりました。ですから、今回は、和歌の修辞について、特に文字遊びや序詞を取り上げてお話したいと思います。

#### 文字遊びの実践

まず、文字遊びの観点から和歌に触れさせていくことにしました。学生の学習態度や、普段話していることを聞いていますと、教材が今の自分とつながりがある時、つまり当事者意識のようなものを持ちえた時に、興味を持ちやすく、また、理解が容易であることが分かりました。自分とは違う世界の出来事と思うと、「分からへんわ」という感じで、そこから学習しようという態度がなくなってくるので、まず、「今のあなたとつながっている」という部分を強調して教えることにしました。これは小中学生に対して教えるのにも有効であろうと思いましたので、そういう実践例を今からやりますよと前置きをして、学生に提示しました。現代の文字遊びなどのように、知的遊戯の側面から和歌を捉えてみるころからはじめてはどうかと考えて行ったのが、次の【ワーク1】です。

【ワーク1】 次の漢字を組み合わせて、別の漢字を作ってみてください。漢字は何度使ってもいいこととします。

山 風 下 魚 雪 春 秋 心 木 高

小学生の頃に、誰もが漢字を組み合わせて別の漢字を作る文字遊びなど、言葉遊びを経験していると思います。それを利用して、導入部として取り組ませました。学生は、スマホで調べたり、友達同士で教え合ったりして、いろいろ漢字を挙げてきてくれます。きゃーきゃーして喜んで取り組みます。そういうことをやって、面白かったねという話から、実はこういうことって文学でもあるんだよねという話へと、もっていきます。抵抗を和らげるため、近代詩を間に入れて説明することになりました。

【ワーク2】 次の詩は、昭和初期から中期にかけて活躍した、三好達治という人の詩です。この詩をよく読んで、( A ) にあてはまる漢字を考えてみよう。

郷愁      三好達治

蝶のような私の郷愁！……。蝶はいくつか籬（注 かきねのこと）を越え、午後の街角に海を見る……。私は壁に海を聴く……。私は本を閉じる。私は壁に凭れる。隣の部屋で二時が打つ。「海、遠い海よ！と私は紙にしたためる。一海よ、僕らの使う文字では、お前の中に（ A ）がいる。そして（ A ）よ、仏蘭西人の言葉では、あなたの中に海がある。」

三好達治の詩で、漢字が表意文字であることを使って作った詩があるので、（ A ）のところにもどどのような漢字があてはまるだろうねということを聞きます。勘の鋭い学生だと割とすぐパッと「母」という答えが出てきます。フランス人の言葉でも、母というのが mere、海という言葉が mer、それに引っ掛けた詩です。この手順で話していくと割と拒否反応がなく、「面白いね」という反応が出てきます。

このあと、やっと、和歌にも似た発想があるんだよということで、次の和歌を提示します。

ふくからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ

（『古今集』秋下・文屋康秀）

解釈ができると、「和歌にもあるんだ」という反応になります。振り返りを見てみると、今の自分と同じように昔の人も文字遊びをしていたと、新鮮な受け止め方をします。さらに「嵐」という言葉には掛詞も入っていますよと説明すると、技巧に感心する学生も現れます。最終的に『古今集』の知的、技巧的な歌風の理解へ話を展開させました。いろいろワークをやってから入ると、比較的理解できるようです。

発展させて、「こういう文字遊びができるのはなんでだと思う？」と問いかけます。「漢字が表意文字だからですよ」ということを説明して、「こうした文字遊びの和歌のルーツというのは漢詩にあるのですよ」ということを教えます。漢詩の離合詩を例にあげ、これも空欄にして、あてはまる漢字をあてさせると、みんな考えます。22 人のクラスはアットホームな雰囲気だったので、もう本当にガヤガヤワイワイ、これじゃない、あれじゃないというように、学生が次々と答えを言ってきました。

最後に、こういうのが平安時代初期の和歌に取り入れられて大流行したから、「吹くからに」の和歌が生まれてくるんだよという説明をして、これ以外にも『古今集』にはこんな和歌もありますよと言って、もう一首紹介します。本当はもっと何首も紹介したかったのですが、和歌一首を読んで理解するのに時間がかかるので、そこまでは至らなくて、簡単にしか説明できなかつたというのが、今でも残念に思っているところです。

2015 年度には、「じゃあ自分でも作って見たらどうかな」というワークも試みました。とにかく五七五七七にならなくても、古語を間違えてもいいからとにかくやってみなさいと言ってやらせてみます。そうしますと、いろいろ考えて和歌を書いてきました。例えばいくつかご紹介すると、

雪の降る師走にとれる魚の意味なればむべ雪の魚をたらといふらむ  
自分を想ってくれる心あればむべ受ける心を愛といふらむ

下心相手がいればむべ相の心を想いといふらむ

こういう作ることにになると、喜んでやります。

この回の振り返りでは、漢字が面白いものであることがわかったという学生や、これなら小学生に教えるときでも楽しそうだなというように書いてくる学生も多くいました。古典が苦手ではあるけれども、やっぱり分かるようになりたい、教えられるようになりたいという気持ちがあるというのは、こういう振り返りからも伝わってきます。「どのように古典を小中学生に教えたらいいか」というテーマを持つことが、彼らを真剣に取り組みさせるきっかけになったのかなと、15回やってみて思っております。

それから、この講義では、もうちょっと踏み込んで、和歌の修辞に関する疑問や気づきも生まれてきています。「六歌仙の和歌には他の歌にはない技術と遊びが見られた。言葉を巧みにあつかい、歌を詠むことができるから六歌仙といわれているのではないだろうか」(2015)。ちょっと誤解がないわけではないのですが、六歌仙について、こちらでそんなに説明はしていなかったのに学生から自発的に出てきた意見です。何人かの学生に対しては、講義を通して割と働きかけができたのではないかなと思っています。

## (2) 言葉遊びと序詞

言葉遊びの観点から序詞の学習をしました。講義では掛詞、序詞、縁語、折句など和歌の修辞について一つずつ学んでいきました。一回の講義で一つ修辞技巧を取り上げるといようにやっていったのですが、今回は、こうした修辞技巧が、現在も大喜利などで親しんでいる言葉遊びともはるかにつながっていることに気づかせることを目的としました。学生の和歌の修辞への苦手意識を取り除くこと、彼らにとっては非常に大きな問題意識となっている小中学生への和歌の教え方の一例を学ぶということを目指に行ったのが次の実践です。

【ワーク1】次の謎かけの（ ）にあてはまる言葉を考えてみよう。

(1) 参議院選挙とかけまして、テスト前の一夜づけとときます。

その心は…「とにかく（ ）が取ればいいと思っている」

(2) 必要経費とかけまして、フォークボールとときます。

その心は…「思ったように（ ）となると、かなりの打撃」

【ワーク2】右の謎かけの面白さは、どのようなところにあるか、考えてみましょう。

まず導入として、大喜利漫才で一世を風靡したダブルコロンのネタを導入しました。ダブルコロンのネタですよというのは全く伏せて、【ワーク1】でいくつかあげて、やらせてみます。その前の掛詞の講義でやっぱり大喜利をやっていたので、「前回とは違うパターン大喜利があるんだけど」と持ちかけてやりました。

答え合わせをすると、(1)は、「とにかく点が取ればいいと思っている」です。  
(2)「思ったように落ちないとなるとかなりの打撃」。これは難しくて、みんなかなり苦労していました。【ワーク2】で面白さを考えさせるのですが、なかなか正解が出ません。やっと「意外性かな？」という答えが出てきます。「そうだよ、かけ離れているものなんだけれども、そこに意外な共通点がある。それを探し出しているところが面白いんだよ」という話をして、「じゃあ、あなたも同じように謎かけを考えてみて」と持ちかけます。

- ・日本の経済とかけまして、霧の日とときます。その心は、「先が見えてきません」  
(2015)
- ・ボーリングとかけまして、ピンチのピッチャーとときます。その心は、「どうしてもストライクがとりたい！」(2015)
- ・宿敵とかけまして、棒たおしとときます。…たおしがいがあります。(2016)
- ・かくれんぼとかけまして、介護士とときます。…どちらも死角／資格が必要です。  
(2016)

学生に考えさせて作らせたあとで、意外なもの同士がもつ共通点への気づきが面白いんだということに理解を至らせます。そういう気づきが根底にあって、こういう言葉遊びがあるのだということも理解させます。

そのあと【ワーク4】に取り掛かります。(1)～(3)の共通点を考えてみましょうということで、元の和歌をいきなりは出しませんでした。

#### 【ワーク4】(1)～(3)の共通点を考えてみましょう。

(1) 浮気な彼のひどい仕打ちで、いつも泣かされている私の袖とかけまして、海中の岩とときます。

その心は、( )。

(2) 大好きな君に思い切ってアタックしてあっさり振られた僕の心とかけまして、岩にぶちあたる波とときます。

その心は、( ) です…。

(3) 私の切ない片思いの思いとかけまして、お灸の火とときます。

その心は、( )。

(1)「浮気な彼のひどい仕打ちでいつも泣かされている私の袖とかけまして、海中の岩とときます。その心は」というふうに問うと、「袖が濡れてるから、いつも濡れてるということ」と書いてきます。(2)は、「さんざんです」とか、いろいろ考えて近い答えが出てきて、「困難です」という答えを言うてくる学生もいました。(3)は割とすっと答えが

出てきて、「くすぶっている」。

だいたい頭がやわらかくなってきたところで、実はこの三つは和歌の次の3首ですよと種明かしをして、講義プリントを配り、確認します。それもどれに該当するかを考えさせました。

- (1) かくとだにえやはいぶきのさしも草さしもしらじなもゆる思ひを  
(『後拾遺集』恋一・藤原実方)
- (2) わが袖はしほひに見えぬ沖の石の人こそ知らねかわく間もなし  
(『金葉集』恋二・二条院讃岐)
- (3) 風をいたみ岩うつ波のをのれのみくだけで物をおもふ比かな  
(『詞花集』恋上・源重之)

「ほら、みんなが今までやってきた大喜利とよく似てるでしょう？」という話をして、ちょっと強引ですが、「さっきの大喜利の時に取り合わせの意外性という面白さがあったでしょ。ここも意外性がないですか？」という問いかけをします。「なんでこれとこれを取り合わすんだろうね」という反応が、学生たちから返っていきます。そこでやっと、序詞の説明に入っていきます。「結局、思いって形がないよね。それを表現したいから、こういう目に見えるもので表そうとしているんだよね」、「序詞の表現から、情景のイメージが出てくるでしょ、頭の中に。そうしたら、すごく印象として頭に残らない？」と話して、序詞についてよりくわしく説明していきます。

#### ● 序詞の効果

- ① 形のない「思い」に「情景」を重ねることで、恋心を「具体的にイメージできる」効果がある。
- ② 詠いたい「思い」と「関係のない事柄」を重ねることで、相手の意表をつく。

②の意外性。①の恋心の具体化。「(情景には、特に)自然の情景が多いですね」ということを言う学生がいます。「そうなのですよ、和歌の贈り手にやっぱりイメージしてもらわなきゃいけないでしょ？それがあまりに難しい例えだったら、イメージできないから、せっかくのメッセージが伝わらないよね。自然の情景が例えに選ばれやすいというのは意味があるんだよ」と説明します。「自然の情景は、みんな共通のイメージがあるからわかりやすいよね」と補足説明もします。その前に掛詞の講義を受けていることもあって、「和歌の修辞は、相手と共有できなければならないものである。だけれども、陳腐な表現であつてもいけない」ということを割とスムーズに理解できるようです。

それから、序詞を巧みに用いた和歌の実例としまして、次の和歌の一例を挙げます。

つくばねの峰より落つるみなの川恋ぞつもりて淵となりぬる (『後撰集』恋三・陽成院)

この和歌の詠歌背景についても説明して、「積もり積もった恋心を伝えたいから、『つくばね～みなの川』の部分の序詞を使って表現しているのですよ」と話すと、「なるほど」と

頭に入ってくるようです。

ここでの学生の振り返りを見てみます。

- ・昔の人は恋を歌にして表現する。失恋時に詠まれることが多く、表現の方法も十人十色ですごいと思った。(2015)

「失恋時に詠まれることが多い」は、勘違いをしているところもあるのでこれは次の講義で修正をするのですが、とにかく様々な表現の方法があることに気づいています。

- ・文章に比喩を使うことで、より読み手に分かりやすく伝えることができている。昔の人はよく考えて、和歌を詠っていて深いと感じた。(2015)
- ・序詞のようなことばがあれば直接言いにくいとも言えるような感じがする。便利だと思った。(2015)

「比喩」という表現は、彼らなりの言葉で理解をしようとして出てきた言葉で、こちらはそういう説明はしなかったのです。こうした振り返りを取り上げて、「読み手」「贈り手」に思いを伝えやすいから贈答の和歌が発展していったんだということを次の講義で説明しました。

- ・昔の人はたとえが自然に関することでおしゃれだと思った。枕詞が疑問。意味のない言葉をつける必要はないのではないか？ (2015)

自分なりに考えを進めて、疑問も持つようになってきます。これについては、次の講義で取り上げ、「和歌は本来、読み上げてうたうものなので、枕詞は語の調子をととのえる効果をねらったものと言われています。あと、ことばに雰囲気をもたせる、ことばのラッピングペーパー（包装紙）のようなものと考えたらよいのではないのでしょうか」という回答をしました。その回の講義は、「(枕詞は) 大事なものにつけるでしょ？」というところから、本題に入りました。振り返りから翌週の講義テーマがさらに深まるということもたびたびありました。

- ・「離れていた方がおもしろい」という謎かけのおもしろさは「気づく」ということが楽しいからだと思いました。このことはいい意味での裏切りとも言えるもので、こうした「気づき」や「裏切り」を大切にして、他の事象と事象を関連づけていくおもしろさを若い児童達にも無意識的に感じてほしいなと思いました。(2016)

この学生は講義が進むとともに感想も深まっていました。22人くらいの講義だと、家族的な雰囲気になってきたので、講義プリントにゴシックの太字にして載せ、一番良かった振り返りとして紹介していたのですが、この学生は取り上げられることが多かったので、かなり一生懸命書いてきました。

和歌の授業実践を通して実感したのが、文字や言葉への興味というものはみんな持って



いるものなんだな、ということでした。

### 現代の歌謡曲とつなげてイメージをする

曲を聴いてそのイメージから入るという講義もあったのです。西洋の月のイメージということで「Fly Me To The Moon」という曲を、歌詞も見せたうえで聴かせます。このあと、サザンオールスターズの桑田佳祐の作った「月」という歌も聴かせて、この二曲から受ける月のイメージの違いについて、意見を書かせてみました。それでいろいろ意見が出てきて、「日本語の歌の『月』のほうが悲しげだ」という感想を多くの学生は持ちます。そのあとで、井伏鱒二の「逸題」という詩、私の大学院の恩師の論文に例に出されていたのを私も借用したのですが、これを取り上げました。

今宵は仲秋名月、初恋を偲ぶ夜。

我ら万障くり合わせ、よしの屋で独り酒を飲む (以下省略)

ここで『我ら万障くり合わせ』って言っているのに、『独り酒を飲む』とは、どういうことでしょうか？　なんでみんな飲んでるのに独り酒なのかな？という問いかけをします。いろいろ考えて、「みんな別々の居酒屋でそれぞれが個別に月を見ながら酒飲んでるんじゃないか」、「集まってるけれども、実はみんな孤独で飲んでるんじゃないか」等、色々意見が出てきます。

それから、「結局、日本人にとって月って何だろう？」という話へ持っていきます。その時に「日本の文学の月のイメージは悲しいものなのかな」という意見が出てきて、そこで紹介するのが、三条院の「心にもあらでうき世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな」という歌です。和歌での月は、詠歌主体と月、一対一の関係で、月は自分を慰めるものであったり、自分の悲しみを紛らわすものであったり、思いを包み込んでくれるものなのだということを説明します。

漢詩の例も挙げて、白居易の「三五夜中新月色、二千里外故人心」を挙げて、漢詩の場合はどちらかというところ、親しい人と月を見てその思いを共有するということに重点があることを話します。これに対して、和歌は、月と詠歌主体はあくまで一対一の関係で、自分と月しかない世界観だという説明を行いました。

そういうことを説明して、三条院の歌を詠んだ時の詠歌背景なども踏まえて解釈をします。そうすると、振り返りで「月というのは、一人になった時や、心に大きな穴が空いた時に穴を埋めてくれるものだ」(2015)と共感して書いてくる学生も出てきます。

そういうふうにならなると、和歌が好きになってくると、「自分は最近楽しくて日常的に掛詞的なものを探さようになってきた」「生活に楽しみが増えたように感じる」(2015)など、新鮮な驚きがあったということを感じて書いてくる学生もいます。この学生は最初は眠そうに聴いていたのですが、もともと国語好きだったが古典自体はあまり好きじゃなかったという学生で、それがだんだん回を重ねると感想が非常に深いところまでいくことも出てくるようになりました。このように学生の振り返りを通して、思考が深まっていく様子がうかがえます。

#### 4. まとめ

これらの実践で、学生の反応が一番大きかったなと感じたのは、やはり文字遊び、言葉遊びのところでした。文字や言葉への興味から和歌へと惹きつけていくのが、最も効果的で、最も容易なのではないかと感じました。子供時代に楽しんでいる言葉遊びと和歌にも共通点があるということが分かると、和歌の学習態度が前向きになり、理解もスムーズになるようです。教育学部の学生であるという点から、子供にどのように教えるかという観点で話を進めていったのですが、そのことによって当事者意識を持って授業を受けることになるので、学習意欲がより高まったように思いました。「古典は難解な言葉で書かれたもの、特に和歌は高尚な文芸であるから自分とはつながりが無い」と感じて、そこから多くの学生が学習意欲を喪失していくようです。そうした先入観を取り払って、古典に興味、関心を持たせる方法として、言葉遊びと和歌を結び付けた学習が有効だったのではないかと考えています。

一方で反省点もありまして、アクティブラーニングが陥りがちな、「授業をした者も、受けた者も活動に満足して、そこから新たに自力で学んでいくという方向にいかない」ということがあげられます。知識が定着しているのだろうかという疑問に思うところもありました。何人かの学生は講義終了後、レポートを書いてきたら、授業で聴いたことを書いていなかったのです。それから、学習を通して、作品の深い理解にまでいったのかどうか、懸念しているところがあります。講義では題詠についても教えたのですが、「和歌は実感を読むもの」という先入観が非常に強くそれを切り崩すのが非常に難しかったです。先入観を切り崩せたかどうかはいまだに自信がないところで、今後の課題としたいと思います。

今後はさらに、学生が自分から知識を取りに行こうと考える仕掛けを作る必要があると感じています。ほかにも学習を発展させて、今度は量を読ませるのが良いのではないかと考えています。講義では、学生の苦手意識を少し取り除くことができたということに過ぎません。より深く学び研究する態度に到らせるには、まだまだ程遠い現状です。今後はより高次の学びへとつなげるようにしたいと考えています。

私の発表は以上です。ありがとうございました。